

■心理学における創造性研究(参考：阿部慶賀『創造性はどこからくるのか』)

- ・ひらめきとは「実体的に扱われながら関係的に成り立っているもの」(p25).
- ・ひらめきは錯覚(p22) → 発明家や作家が着想を得たひらめきの後日譚も、本人の印象に残っている情報からでっちあげられただけのもので、…ひらめきのトリガーは違う場所にあったということも十分ありうる(p54).
- ・「ひらめこう」と思ってひらめくことができたならそこに驚きはなく、ひらめきとは呼べないものになる(p75).
- ・創造性に関する書籍や読者が求める近視眼的な目的→要因だけ揃えればひらめくわけではない(p221).
- ・遺伝的アルゴリズムを使った創造的問題解決の計算機モデル. みなと同じアイデアを探索すると、環境や状況に合わなかったら共倒れと絶滅. 突然変異的な(常識から外れる)人々が少数であってもいけないといけない(p35).
- ・「ひらめき」において計画性と即興性の微妙な「間」をどこにおくか考えることはすごく大事なこと(p28).
- ・私たちは自分をひらめかせることは難しく、チャンスやヒントをつかむ準備をするのがせいぜい…しかし私たちは誰かのひらめきのきっかけになることはできるという何とも皮肉だが素敵な存在でもある(p76).

■ひらめきを個人の頭の中から引っ張り出す(p21)

- ・個体主義的なもの(昭和的な響き)としての、実態論的(生理学的)なひらめき(p18).
- ・「ひらめき」を認定する社会的な眼差し. 成果主義的なひらめきの反対の、協働的なひらめき(p19).
- ・ヒーローの独力を目的としなくてもいい. 共同の力を認め、支え合えばいい(ヴィゴツキー的能力観)(p45).
- ・個人の主体性ということ疑って、人間をもっと社会的・集合的・弁証法的存在としてみる(p21).
- ・ひらめきのダーウィニズム. 無数のひらめきがあちこちにあり、いつか新規で役に立つものも出てくる(p33).
- ・「新規だからクリエイティブ」とは限らない. 「聴いたこともないような曲」は知覚できない(p23).
- ・心理学の一番の問題は「因果律的傾向」だとやっと気づいた. 57年かかって、やっと発達した(p232).

■「がつつく」成果主義の対義語としての「不確実性への耐性」

- ・「ひらめき」は基本的に即興、その場の中で何かが起こっている…だからといって計画がないわけじゃないけど、…計画したからできるというわけでもない(p28). ⇔ PDCAは成果にむかって「がつつく」成果主義(p29).
- ・成果主義の対義語が「不確実性への耐性」、実がなることよりも耕すことが大事(p29).

■それぞれに伸びる苗床(p119)と因果律

- ・正規分布の山の右側の裾野の子だけが活躍するようでは、教室はふるい(p119).
- ・教育に有用性を求める姿勢、この「ガッツキ」が因果律. 有用性のためというより、その文化の仲間になって周道的に参加して「ご縁に開かれること」(学習とは周道的参加(peripheral participation))(p229).
- ・仲間と共に支え合い、目下には自力ではできないがみんなだと出来る場のことを、ヴィゴツキーは「発達の最近接領域」(自力ではなく、より大きなもの(他力)に支えられて生きている、という気づき)と名づけた(p116).
- ・世阿弥の「一座(チーム)建立(ビルディング)」→場(座)は誰かがつくるものではない(p120).
- ・知識・技能(種)を学べば活用(芽)できる、というのは単純な因果律. 一方、花が咲いているという事実は縁起. …種の1つが、たまたま日当たりのよい場所に運ばれ、…雨に流されず、鳥についばまれず、…土壌からの水分と栄養をたっぷり得て、…今ここで花は咲き育っている. 因果が成立するには多くの要素が関わっている(p112).

■「やり方を知らないまま取り組むこと」が学習(doing the unknown things)

- ・大発明のようなひらめきも大切. 誰かのすごい創造性で世の中は便利になる. 同じくらい、普段づかひのひらめきも大切. …目の前の走路をもっと安心、安全に進めるように、…ふつうの日常を高度化する(p110).
- ・ひらめきは、安定していると思っている中にくさびを打ち込む…Stableなものの見方をUnstableにする(p41).
- ・「ひらめき」は、まだやったことないこと. いつも行っていることは、ひらめきではなく「行動(doing the known things)」。…うまくいくか分からないけど、ひらめいたことをやってみることは行動ではなく「学習」. 学習は、やったことないことに取り組むことなので、即興だし挑戦だし練習だし実験だし創造(p114).
- ・縁起、非・心身二元論は、修行して理解する性質のもの. 人々はどうしても個体主義的だから(p224).
- ・プロセスや成果物を他者に説明していく営みは「ひらめき」の契機につながる(p38).
- ・安定した状態で変数を変えるとどうなるか、可能的世界を探索してみることはひらめきに大事(p43).

とってもおもしろいので…用語集(p236からp238)より抜粋

資源

(略)…資源というのは、そのもの・ひとに利用可能性を認めた主体＝資源利用者がそう呼ぶ名づけた。もの・ひと自体の絶対的な性質ではなく、利用者に相対的、関係的な属性だ。…(略)

個体主義

(略)…「花子が黒板で文章題を解いた」というのは個体主義的解釈である。教育実習生の目にはそう映るかもしれない。でもベテランなら「花子が文章題を解いた、という事態が観察可能(可視)になるような状況が、仲間、教師、教材教具、課題の構造、普通の学級経営などの要素が創発して成立している」と考えるだろう。…(略)

心理的安全性

(略)…心理的安全性は個人の能力ではない。安全なチーム、…にするためには、個人練をしても効果がなく、チーム練が必要になるだろう。心理的安全性の主語は「I」ではなく「We」なのだ。…(略)

発達

(略)…発達には2水準あって、(1)レベル1は独力でできること、(2)レベル2はみんなとならできること、だと言ったのがヴィゴツキー先生。今は1人ではできないけれど、先生や仲間とならできる、後者の発達(2)を支えるのが教育だと主張した。(略)ヴィゴツキー理論に基づく発達支援グループの主宰ロイス・ホルツマンは、「発達とは、今のあなたのまま、今のあなたではない未来のあなたをふるまうことで、あなたとは誰であるかを創っていく活動。それはソロではなくアンサンブルでのパフォーマンス」と…定義する。…(略)

他者貢献

(略)…「なんで勉強するの？」と訊かれて「未来は博士か大臣になるためだ！」と答えるのは昭和の教育で、今の対話的な教育潮流においては、他者貢献・社会貢献のため、学校はその練習だ、というのが1つの回答になる。…(略)教育においても、他者貢献を動機とした手法は、聴いて理解することが目的の時とは異なった、活動のリアリティにつながる。

正統的周辺参加

(略)…「正統的(レジティメイト)」つまり職業体験コースではなくその世界に入門済みであり、「周辺の(ペリフェラル)」つまりただの練習ではなく本当の生産活動のうちの一部を行い、「参加(パーティシペーション)」つまりこの実践のメンバーとして皆と生きていくことである。…(略)言い換えれば、「あんな人」を目指す人たちと一緒に生きること、である。…(略)